

【背景と目的】 対話の主観的評価は、対話の本質ではない

対話とは一体何であるか？という「問い」に「答え」するのに、経験に基づいて答える仕方は全般的な外れである。その例として挙げられる一つ目は、ある言語活動が何に即してであるのかという内容のことである。すなわち、「私とは？」「道徳とは？」「存在とは？」のような特殊なテーマを扱う言語活動がすなわち対話であるとは言えない。二つ目は、言語活動に関する態度のことである。例えば、セーフティ（安全性）、パレーシア（誠実性）、ゼーテーシス（吟味探求）、アグノイア（無知への気づき）などは、対話に関する主観的評価の類別にすぎず、対話の何であるかを決定するものでは全然ない。なぜなら、このような様態を欠く対話が存在することは自明とされ問題とされるからである。つまり、対話の「何であるのか」は前提とされたうえで、それが「どうなされるべきか」という規範が問われたり要請されているにすぎない。「どうなされるべきか」という問いよりもっと手前に、対話とは一体何であるのか、という問いがあるのは自明である。本発表は、その問いが存在することを、答えることによって、そして、それこそが対話であることを示す。

【本論】 対話の客観的基準としての対話の四言と対話実践表

対話の本質が、問いと答えであることは、問いと答えの両方を全く用いないとした場合には対話ができない、ということから全く自明である。簡単のために、「問い」とは疑問文のことであり、答えはその疑問文に回答する文である、としよう。そうすると、ここで容易に反論が予想される。すなわち、疑問文と応答文の単なる組み合わせというだけでは、対話になりはしないではないか。ある事柄についての疑問文と応答文でなければ、問い手の意図が伝わっていないかもしれない、また答える人がそのつもりで発していない言葉が応答文になってしまうのではないかと。このような反論あるいは反問はすでに対話であるところの「問い」や「答え」を前提としている、というのは言うまでもないが、まさにそのようなことが如何にして可能であるか、ということが全体として示されようとしているのである。まずそのことを確認してもらいたい、そのことはとても重要であるから。

そのうえで、問いと答えとが成立することについて、（1議題）問いと答えとを成立させる「何か」がなければならない。すなわち、Aであるか？と問われて、Aである、とか、Aでない、とか答えるときの、問いと答えに共通のAが「何か」なのである。これは、対話をするときのいわゆる話題のことである。問い手が答え手に対して問いかけたいところの「それ」、答え手が問われていると思って答えるところの「それ」は、問い手と答え手とが共通にしている話題であり、これを「議題」と呼ぶ。（2議論）加えて、対話は問いと答えがなされる場所に理由がなければならない。このことは、話題を共有して問いと答えがなされたにせよ、せいぜい会話や談話にしかならないことから理解されよう。つまり、対話である限り、問いが出されたり、答えが与えられたりするならば必ず理由がなければならない、ということである。これを議論と呼ぶ。（3量）上述のような議題と議論は、対話がなされる限りは、必ず一つ以上あるのでなければならない。つまり、議題がゼロの対話、議論がゼロの対話、このような言語実践は対話とはなりえない、ということである。対話である限りは、議題も議論も「いくつか」あるから、これを「量」＝「いくつか」と呼ぶことにする。

（4質）ここまで論じてきたところ、議題及び議論は、いずれも問いと答えの対として提示されてきたが、このことは問いが単独で、あるいは答えが単独で、なされる場合には、議題や議論とはなりえない、ということになる。それでは一体問いや答えは議題や議論、つまり話題やその理由に関してどのようなものとして考えればよいのか、という疑問が提出されるであろう。ところがそれもまさに「そのように」理解されるべきでなのである。すなわち、話題や理由を、ある答えをもつ問いのように、ある問いをもつ答えのように、しているのが、疑問文や応答文なのである。すなわち、問いや答えというのは、議題や議論が「どのような」ものであるのかを表示する。それゆえ、問いや答えは「質」＝「どのよう」と呼ばれる。

かくして対話とは何であるかと決定する四つのもの（四原因）が得られ、我々が対話の実践に用いる言語規則が説明される。つまり対話の言語活動における規則は、これら四つのものがあたかも原素とみなされたときの配合や形態などによって説明されるのである。そうすると、この四つを言素として規則的に組み合わせられ、対話実践表に網羅されることになる。これが、我々の望んでいた対話とは何であるか、の問いに答えるところのものなのである。

対話実践表	議題 なに		議論 なぜ	
質 どのよう	問い	Xか？	問題	Xであるか、について
	答え	Xだ	命題	Xである、について
	問答	X(であること)	論題	Xであるかどうか、について
量 どれだけ	単義	あるXはY	論点	XについてY
	複義	多くのXはY	論脈	XならばY
	合義	全てのXはY	論究	XとYはX'とY'

(きもと・ゆうた) 哲学及び対話の活動や研究を在野で行っている。これまで主な研究を行ってきたのは以下の通り。

- 古代ギリシャにおける対話：
ソクラテスの対話、プラトン対話篇、アリストテレスの対話論（トピカ、ソフィスト的論駁論）
- 論理学とカテゴリー論：
カントとアリストテレスに共通の推論の定義の仕方とカテゴリー論について
- 2016年5月 於 応用哲学会 「対話の量的評価可能性について」発表